

宮城県に於ける二条大麦栽培上の問題点

浅野 清 美

(宮城県農試)

1. はしがき

宮城県の二条大麦は相当以前から栽培されていたが、耕種的、技術指導、或は流通関係については麦酒会社が直接関係していたために、県関係の研究機関で積極的な試験研究はなされていなかった。しかしその後情勢が変り、単協一経済連-全販連の系統取扱いが確立するに至つてからようやく二条大麦の栽培試験ならびに技術指導をするようになった。

2. 二条大麦の品種について

本県ではキリン直1号を主体として栽培されているが、質的には(特に醸造用)優良品種であるが栽培上難点が多い。今その代表的なものをあげると次の通りである。

1. 熟期が遅く収穫期が梅雨になる。
2. 長稈で倒伏し易い。
3. 病害(特に大麦縞萎縮病)並びに寒害に弱い。

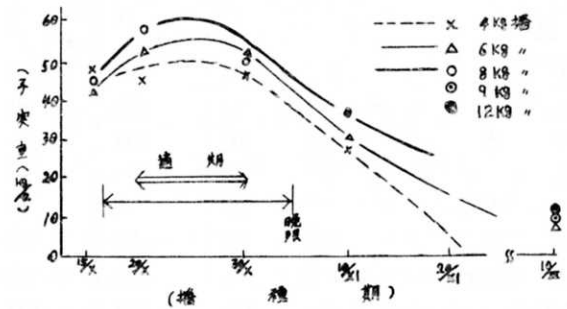
第1表 二条大麦品種比較試験成績

種別	昭和 37 年度 産				昭和 38 年度 産			
	品 種 名	成熟期 (月日)	子実重 (Kg)	倒伏 程度	品 種 名	成熟期 (月日)	子実重 (Kg)	倒伏 程度
二条大麦	関東二条1号	6.14	47.1	ム	関東二条1号	6.15	43.6	ム
	関東二条2号	6.10	43.8	ビ	関東二条2号	6.14	44.9	ビ
	栃木ゴールデンメロン	6.17	40.6	少	キリン直1号	6.19	43.1	多
	関 東 中 生	6.13	49.6	ビ				
皮比較 麦	シヨウキムギ	6.14	51.9	中	シヨウキムギ	6.18	45.6	中

将来良質、多収、強稈、耐病性の強い早生種になるべく切替え、本県の栽培面積(現在120ha)を大巾に伸ばしたい。

3. 二条大麦の播種期、播種量について

本県の播種最適期は試験の結果第1図の通りで10月20日~10月30日頃である。梅雨の遅い年は早播、晩播において収量に余り差はみられないが、梅雨の早く襲来する場合は、適期間の早い方が安定した収量を示すようである。

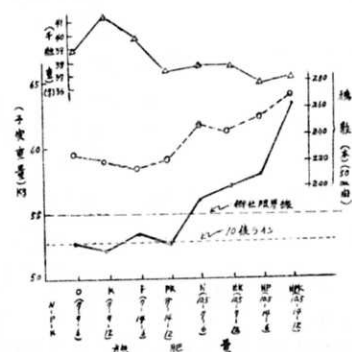


第1図 ビール麦の播種期、播種量と収量との関係 (昭和36年播)

4. 二条大麦の施肥量について

ビール麦は多肥すると第2図に示すように相当な多収を示すが、前述した通り倒伏し易いし、しかも品質が悪くなるので倒伏しない安全な施肥量であつてほしい。本県では施肥量試験の結果N-P-K, 7-10-6 (Kg)が適量と思われる。

多肥(特に多窒素の場合)であると倒伏するばかりでなく、蛋白含量が多くなり、ビール醸造用として不合格になる場合もあるので注意せねばならない。(蛋白含量は8~12%が最も良いとされている。なお、第2図の播種期は10月15日)



第2図 ビール麦の施肥量と収量との関係

5. 二条大麦の病害について

二条大麦の特徴の一つとして、病害に弱い点が問題になる。本県の仙北地帯に昭和36年度播種の二条大麦(ビール麦)に黄枯症状が大発生し、2~3の町村では殆ど全滅状態迄になった。第2表は、たまた大発生の地帯に品種適応性検定試験を実施して居つたので、病害の品種間差がつかめたわけである。このように品種によつて

若干の差は認められるようである。この病害の主因解析については、関係町村から強い要望があり本場作物保護部の協力により、主因究明の結果、大麦萎縮病（ウイルス）とピチウム菌（糸状菌）の合併症状であることがわかった。しかしこれら両者の関係については不明で、今後の研究に俟たねばならない。

第2表 ビール麦現地試験病害調査成績
(宮農試 昭.36)

品 種 名	1 区 (%)	2 区 (%)	平 均 (%)
U S 6	90	95	93
金子ゴールデン	80	100	90
関 東 中 生	50	100	75
関 東 2 条 1 号	70	90	80
Ymer	95	90	93
博 多 2 号	70	70	70
Svan hals	50	50	50
栃木ゴールデンメロン1号	100	100	100
Carls berg	95	90	93
キ リ ン 直 2 号	95	60	78

6. 二条大麦の乾燥方法について

ビール麦の収穫期は丁度梅雨初期になるので、如何に雨害をさせて良質の麦を生産するかが最終的に問題になる。本年のビール麦検査成績をみると、合格率が76%（宮城県）で不合格品の80%は色沢不良である。他の20%

は過度の調製による剥皮であるという。このことから考えると如何に刈取後の処理、特に乾燥、調製が大切であるかがわかる。そこで梅雨に入らない中に刈取られる品種ということになるが、現在の品種で考えるとなるべく生育を早めるように栽培（通期間の早めに播種だけで3～4日位の成熟期に差がある）し、第3表に簡単な試験

第3表 ビール麦の乾燥試験成績
(宮農試 昭.36) (拔萃)

区 別	項 目	品 質	発芽歩 合(%)	備 考
1. 地	干(慣行法)	中ノ上	100	早めに脱穀
2. 棒	掛	中ノ下	91	穂発芽少
3. 簡易乾燥	(ビニール)	中ノ中	99	
4. 架	掛	中ノ中	98	穂発芽少
5. 架	掛(ビニール)	上ノ中	100	

成績を示したが、なるべくビニール被覆の架掛を行い（地干を1～2日行い得る天候であれば理想的である）雨に直接ふれるのを極力さけるようにし、乾燥後は過度の調製による剥皮にならないように脱穀機の廻転数を加減して（500～600回）、早目に調製すべきである。

なお、通風乾燥機によるいわゆる機械乾燥については、今後の研究問題で、病害防除と併せて早急に解決すべきことであり、この点がビール麦栽培の直接的な阻害要因ともなっているため、この点について重点的に継続研究してゆきたい。

青森県におけるてん菜栽培の畑作経営 における意義について

佐々木 勝 美

(青森県農試)

1. ま え が き

畑作農業では作目の種類が非常に多く複雑で、しかも収益性が低いということは周知の事実である。

その中で、近年国内甘味資源育成の国家的見地から、農家の現金収入源として安定した価格のてん菜が、北海道以外の地域にも導入されて来た。

青森県においても、昭和37年から奨励され、一畝3,000haを越すにいたつた。

本稿ではてん菜の経済性を、他の主要な畑作目との比較を加味し、奨励第一年目の調査結果を報告する。なお資料は、昭和37年てん菜生産費調査で、青森県南部4地区22戸の集計結果を利用した。その他詳細は「てん菜の

経済性に関する若干の考察」（青森県農試経営資料6号38年3月）に基づいているので省略する。

また、てん菜以外の作物に関しては「青森農林水産統計年報」によつた。

2. 作付面積、粗収益の年次変化

青森県のてん菜が畑作物の中で、面積的にどの位置にあるかを示すと第1表の如くである。

作付面積において、なたね、大豆、馬鈴薯は群を抜いている。しかし最近6カ年間で増加傾向の著しいのは、てん菜をはじめ、飼料作物、陸稲、なたねなどであり、大豆、馬鈴薯、ひえ、小麦などは漸次減少している。

一方粗収益では、37年は馬鈴薯が最高で、以下乳牛、